

# 「剥き出しの生」をめぐる G・アガンベン のアーレント批判を考察する

——われわれは回教徒になりうるか——

阿部 里加

## はじめに

近年、ジョルジョ・アガンベン（Giorgio Agamben）の言説が脚光を浴びている。1995年に刊行された『ホモ・サケル』<sup>①</sup>によりアガンベンの名は一躍世に知られるようになったが、そこで強調されているのは副題にも記されている「剥き出しの生（nuda Vita）」という概念である<sup>②</sup>。この概念が照らし出すのは、ナチスの収容所においてもはや生きる気力を失い、服従するより他になく「生きる屍」と化してしまった者たち、すなわち「回教徒（Muselmann）」<sup>ムーゼルマン</sup>と呼ばれていた者たちの生である。裸のまま法的保護の外に投げ出された存在である「回教徒」たちの声にならない声こそが真実であるとアガンベンは述べ、証言することの絶対的不可能性を主張している<sup>③</sup>。この主張が、証言することや物語ることの意義を論じたハンナ・アーレントに対する批判を下敷きにしていることは疑いない。すなわち、アーレントの思想構造の内側には証言不可能な「剥き出しの生」という概念は存在せず、それゆえ「生政治（bio-politique）」<sup>④</sup>の問題を扱う視点がアーレントには欠落しているというのがアガンベンの批判である。

ジュディス・バトラーは『国家を歌うのは誰か？』のなかで<sup>⑤</sup>、アガンベンの思想の枠組みの多くがアーレントに依拠しているという点を指摘したうえで、二人の思想家の異なりについて言及し興味深い議論を展開しているが、アーレントの思想分析には不十分な点があるために二人が共有していた関心については看過されているように思われる。よって本稿では、アーレントへ差し向けられているアガンベンの批判の妥当性と問題点を明らかにしていきたい。そこで、始めに、彼の思想を概観し（一）、次にアーレントにおいて指摘されている、「剥き出しの生」および生政治に関する視点の不在という点を検討する（二）。

それにより浮かび上がる論点から、アガンベンの批判の問題点を指摘し(三)、アガンベンとは異なる立場から思索したアーレントの生について明らかにしていきたい。

## 一. アガンベンの思想

始めに、アガンベンの主張を概観しておく。アガンベンの仕事で特筆すべきは「鬪 (soglia)」への注視である。彼のエネルギーはゾーエーとビオス、オイコスとポリス、外部と内部、生と死、人間的なものと非人間的なものといった西欧思想の伝統的な区別が不分明となる地帯へと注がれており、そこに定位することにより自らの思考を開始させている。この思考は、近代においてゾーエー、すなわち生物学的な生がポリスの領域に包括され、政治が人々のゾーエーを統治行為の中心に据えるようになった事実についてフーコーが名づけた、「生政治」の解明を目的としている。フーコーにおいてこの解明が完遂されなかった理由は、上村忠男によれば、フーコーが「生政治」を近代に特有の新しい政治形態として描き、そのありようを捉えるには主権や国家の理論にもとづいた伝統的アプローチは無効であると放棄した点にある<sup>6)</sup>。そこから、アガンベンは「生政治」が必ずしも近代に特有のものではなく、古代ギリシア＝ローマの世界において生政治的権力なるものが既に存在していたということを論証するために、人間の法や神の法といった裁可された形式を離れて、聖事の圏域でも世俗的な活動の圏域でもない圏域を理解しようと努めなければならないとし、この圏域を開く暴力に注意を促している。

その暴力とは、人間の法から排除するのみならず神の法からも排除するという二重の排除を伴った暴力であり、この暴力が加えられているのが「剥き出しの生」すなわち「聖なる生 (Homo sacer)」(以下、ホモ・サケルとする)であるとアガンベンはいう。ホモ・サケル<sup>7)</sup>は、主権に「剥き出しの生」を生産する能力がはじめから備わっていることを示す<sup>8)</sup>。またホモ・サケルが重要であるのはそれが主権からは締め出された経験を持つために政治的空間を構成した原初的排除の記憶を保存しているからである。このような主権的な締め出し構造を、現代の政治関係および公的関係のうちに見て取ることが要請されている<sup>9)</sup>。アガンベンは現代においてはすべての市民が潜在的にはホモ・サケルの

姿を呈していると述べる。すなわち、「剥き出しの生」と〈生の形式〉<sup>90</sup>、ゾーエーとビオス、生と死、ノモスとピュシス、内部と外部といった区別の中に「宙ずり」の状態にわれわれの生はおかれており、それら諸々の区別と境界線のすべてを無効とし消滅させる力が生政治である<sup>91</sup>。

こうしたアガンベンの主張がアーレントの立場とどれほど対立するものであるかを判断することは決して容易ではない。さしあたり、アーレントが生政治について何も述べていないという批判の妥当性について検討を加えることは必要な作業に思われるので次節において考察していく。

## 二. アーレントにおける生政治の不在？

おそらく、アーレントが明示的に語らなかったものの一つは、「剥き出しの生」である。このことは、アガンベンからすれば奇異に映っているにちがいない。というのも彼は、アーレントが『全体主義の起源』（以下、『全体』と略記）第三部の「強制収容所」という節において、収容所の生活を「生きる屍」とし、ガス室で終わりを迎えるムーゼルマンの非人間的な様子について詳細に語っていることを知っており、そのムーゼルマンの様相からは「剥き出しの生」が導出されてしかるべきだからである。

では、アーレントは「剥き出しの生」について全く言及していないのであろうか。D・ヴィラによれば、アーレントの関心は「全体主義の本質」に向けられており、彼女にとって重要であるのは、収容所の存在により、法律上の主体が抹消される世界、すなわち「人間の完全な公民権剥脱が持続する」世界が現出する可能性が切り開かれたという事実であった<sup>92</sup>。アーレントの次の言葉に注意したい。

人間の権利を無効化すること、つまりその人がもつ法律上の人格を殺すことは、その人を完全に支配するための必要条件である。これは、初めの頃に実験台となった犯罪者、政敵、ユダヤ人、同性愛者などの特殊な範疇に当てはまるばかりではない。全体主義国家の住民全てに当てはまるのである。<sup>93</sup>

ここで言われている、犯罪者や政敵らには通常の刑事制度が適応されるが<sup>94</sup>、そのような刑罰制度とは区別された獄舎として強制収容所をとらえ、そこに「生きる屍」を存在させるために、まず法律上の人格を無効にし、人間を法的な保護の外におくことがアーレントに要請されたとヴィラは述べている。さらに、「生きる屍」を存在させるために、アーレントは強制収容所という環境において良心的な行為者または道徳的行為者を殺害されていることを指摘する<sup>95</sup>。そこでは、人間の自発性や活動の能力は破壊され、終には人間の前提をなす人格の個性とその唯一性すら抹殺されている<sup>96</sup>。

ところで、収容所はこのようにして人間を全体的に支配していくがそれでもなお残されている人間性の残滓について、アーレントは次のように述べている。

……その後全体的支配を要求する人間がしなければならないことは、単なる存在の中にも必ずあらわれてくる自発性をことごとく取り除き、それが非政治的もしくは無害なあらわれ方をしようとしまいとに全く関係なく、人間の最も私的な生活表現のあらゆる形式の中に自発性を嗅ぎ出すことである。パヴロフの犬は最も基本的な反応に還元された人間動物の見本であって、いつでも殺して、同じ行動をする他の反応の束と取り替えることができる。このパヴロフの犬こそ全体主義国家の〈市民〉のモデルなのだが、収容所の外ではこのモデルは常に不完全な形でしか作り出せないのだ。<sup>97</sup>

この引用においてはまず注意すべきは、収容所において最後まで支配されずに残されている自発性が私的な表現にあらわれるという点である。おそらくそれは、眼差しや身振りといった言語によらない表現である。ツヴェタン・トドロフは『極限に際して』<sup>98</sup>のなかで、収容所では単に生き延びることよりも人間的らしさを保つことの方が重要である場合が多かったとし、連帯や他者への配慮、精神の生活、これら平凡な美德が極限状態でも残されていたと述べている。このような人間の尊厳なるものを少なからず見出そうとする欲求をアーレントは否定しないと思われる<sup>99</sup>。この引用で、アーレントとわれわれの文脈においてより重要に思えるのは、引用後半に登場するパヴロフの犬というモデルである。これについては、次の引用に注意したい。

収容所は、……科学的に厳密な条件のもとで人間の行動方式というものを除去し、人間を同じ条件の下では常に同じ行動をするもの、つまり動物ですらないものに変える (transform) という恐るべき実験のためにある。動物ですらないというのは、空腹の時ではなく鈴が鳴った時に餌を食うように仕込まれたパヴロフの犬とは、普通の動物ではなく、本性をねじまげられた (perverted) 動物だったからだ。<sup>80</sup>

ここでパヴロフの犬という喩えが示している二つは、動物的生と本性が改変させられている生、これらが区別されているということ、そしてこの区別が全体的支配の場である収容所において生じているということである。アーレントは、全体主義イデオロギーの本来の目標は、人間存在の外的条件の改変でも社会秩序の革命的な変革でもなく、人間の本性そのものの改変であり、全体的支配のなかで脅かされているのは人間の本質であると述べている<sup>81</sup>。政治哲学者のエリック・フェーリゲン は、彼女が人間性の改変などという考えを抱いていることに驚きを表明し、そのような考えは西洋文明の知的崩壊の兆候であると批難した。Y・ブルーエルは、アーレントが人間性の改変と言う時、それは根本的な人間の条件のねじまげ (pervert)、諸能力の発揮を不可能にするほどの根本的なねじまげを意味しており、改変という目標が完全に達成されるには、世界が強制収容所にならねばならないであろうと述べている<sup>82</sup>。

人間性のねじまげは、強制収容所という実験室のなかで任意の群集に対して実行された人間の不用化と密接に関連している。そして、この人間の不用化というプロセスが強制収容所の内のみならず現代世界において広がっている事実をアーレントは『全体』の中で叙述している。

人間を不用 (superfluous) なものにするために全体主義の発明した制度の恐るべき危険は、急速に人口が増加し、同時にまた土地を失い故国を失った人々も着実に殖えていくこの時代においては、いたるところでいつも無数の人間が……実際に不用になりつつあるということにある。こうした状況を見ると、時代の決定的な政治的・社会的・経済的動向のすべてが、人間を本当に不用のものとして取り扱い操縦するのに役立つ制度とひそかに結託しているかのように見える。<sup>83</sup>

この引用で難民の問題が指摘されている点が注目される。また、引用の前の箇所では地球全体を支配下に置く実験すなわち原子爆弾の実験が取り上げられている。アーレントは、全ての人々がひとしなみに不用になり、この世に生まれてきても来なくても自分には同じだったと自己の不用性を感じるシステムとの関係においてあらわれてくるのは根源的な悪（Das radikale Böse）であると、引用の直前で述べている。抵抗できない無力感を普遍的に浸透させ、自分たち全員を殺害する非人間的な運動の法則をあたかも動物のように従順に受け入れるようにすることは人間性をねじまげ破壊することに他ならない。このことをアーレントはヤスパースとの往復書簡のなかで、根源的な悪との関わりにおいて記している。「根源的な悪が本当のところは何であるのか、わたしには分かりません。しかし、それは人間を人間として不要にする（Überflüssigmachung von Menschen als Menschen）現象と何らかの関係があるように思われます」<sup>29</sup>。

ところで、このように人間として不要であると宣告され、自分を不用なものとして排除された生が、ムーゼルマンの生や「剥き出しの生」ではないとしたら、いったい何であろうか？

### 三. われわれの生は単にホモ・サケルであるのみか

アガンベンが主権的なものと聖なるものが近い関係にあることを指摘し、人間の法からも神の法からも離れた圏域を開くことにより生政治を解明していることは特筆すべき仕事ではある。けれども、アガンベンがこの思考の枠組みをそのままアーレントに重ねたところで<sup>30</sup>、二人の思想家の相違が明らかになるわけでは必ずしもないことは、前節で述べたような、不要にされた生と「剥き出しの生」に示されている。また「宙ずり」の状態に関しても、アーレントが『全体』の中で語る次のことはアガンベンにはどのように映るであろう。

……外見的な無意味さからくるこの非現実性は事実上、あらゆる形態の強制収容所の根底にある。……強制収容所は、死後の生についてのヨーロッパの三つの重要な概念、すなわち冥府、煉獄、地獄における生の観念の三つの型に分けることが出来よう。……この三つの型に共通するのは、そこに迷い込んだ人間たちはもはや存在していないかの

ように…取り扱われるということである。—まるで彼らはもう死んでしまっていて、彼らが成仏するまでの間、どこかの気の狂った悪魔がほんのしばらく彼らを生と死の間にとどめて面白がっているかのよう<sup>89</sup>。

ここでは、アーレントが「宙ずり」という状態を考慮のうちに入れていることが確認できる。ただし、その「宙ずり」状態が非現実性を帯びつつも、きわめて具体的な人々の生として考察され、またそのように叙述されている点がアーレントの特徴であるように思われる。バトラーはアガンベンに向かって、ポリスから追放され法の保護を受けずに国家の権力に晒される生について、それを単なる「剥き出しの生」と考えられるのかと疑問を投げかけている<sup>90</sup>。すなわち、追放されている人の生はどのようなものか、外国人労働者として生きている人の生はどのようなものか、占領かで生活しているパレスティナ人にとって生はどのようなものか、戦地へ行く青年の生はどのようなものか、生命維持装置によって延命させられている人の生とはどのようなものか、緩和ケアにより死を待つ日々を送る人の生とはどのようなものか……。これらの生を「剥き出しの生」によって捉えることは果たして可能であろうか？ このような疑いはアーレントの文脈を追う限り生じてこない、というのも、アーレントの場合、全体的支配のもとで不要なものとして追放され、パブロフの犬と化してしまった人の生においても、残されたその動物的生、すなわちゾーエーの内に自発性を見出そうとするからである<sup>91</sup>。おそらく二人の思想家を分かちつものは、この人間性の謂いとしての自発性である。そして、この自発性のために生政治という現象にたいするに叙述の違いが二人の間に生じていると考えられる。よって、アガンベンから見てアーレントが生政治について何も語っていないという批判は必ずしも妥当しない。それどころかむしろ、その生政治にかんしてアガンベンに対して突きつけられるべき問題があるのではなからうか。

アガンベンはあらゆる政治事象の叙述において、「剥き出しの生」という概念を持ち出してくるが、それが彼の生政治に関する分析を平板なものにしているとバトラーは指摘する。

国家権力を免れ、国家権力を失速させるような抵抗やエイジェンシー

や対抗移動の形態を理解するには、もっと複雑なやり方で権力の多面性や術策を解き明かさなければなりません。欠格について語るときの主要用語を、主権性や「剥き出しの生」にまたしても措定してしまったら、それが属している権力の別の網目を理解したり、権力がその場でいかに再形され、いかにそこに染み込んでいるのかを知るために必要な語彙を、自らなくすことになるのです。<sup>83</sup>

単に生政治の事実を告発することがアーレントの目的ではない。この引用で指摘されている、権力の別の網目や支配の形態を記述することこそが、アーレントが『全体』や「暴力について」<sup>84</sup>という論文で試みた実践であり、全体的支配という現象を分析するためには不可欠な作業であったにちがいない。<sup>85</sup>

アガンベンへ改めて問うておきたいことは証言に関する主張である。「剥き出しの生」、ホモ・サケル、そして「宙ずり」の状態に定位して思考することで新たに開かれる地平があるとすれば、その地平を見出すためにわれわれがすべき事は、もはや回教徒やパレスティナ人、難民になるより他にないのであろうか。この問いかけに対するアガンベンの回答は結論から言って是であり、また非でもある。『アウシュビッツの残りもの』において、収容所はそれを体験した人にしか決して語りえないのであり、残された者の証言よりも真性を帯びているため優先されると述べられこれが、アガンベンの証言論<sup>86</sup>として知られている。しかし、そのような、証言することの絶対的不可能性をレーヴィンにおいて見出す他方で、彼に生じているパラドックスへとアガンベンの関心は向けられている。この点は注意をひくので引用する。

回教徒においては、証言することの不可能性は、もはや単なる欠如ではなく現実となっており、そのようなものとして現存している。もし生き残った者が証言するのがガス室やアウシュビッツについてではなく回教徒のためであるのなら、もしかれがあくまで話すことの可能性から出発してのみ話すなら、そのときにかれの証言は否定されえない。アウシュビッツという、証言することの出来ないものは、絶対的にして反論の余地なく立証されるのである。<sup>87</sup>



ここでは証言することの限界および不可能性と同時に、証言することの絶対的な可能性がのべられており、アレントの語りと共有する部分があるように思われる。

## さいごに

アガンベンの「剥き出しの生」は、くりかえすと、生物学的生命と政治的空間という区別、ゾーエーとビオスの間に「宙ずり」にされている生であり、法的保護から排除された生であり、それは回教徒に具現されていた。この「宙ずり」の状態という圏域に立って思考することにより、新たな地平が開かれていくという意味において、区別や境界線は流動的であって決して動かぬものと看做すことは出来ないとアガンベンは述べている。この点は、様々な区別立てをして論じるアレントとは立場を異にしている<sup>88</sup>。ところで、語られざるもの、証言不可能なものや体験は、闕や宙ずりの圏域内のみ保存されているのだろうか。

アレントの場合、語られざるものは私的な領域の暗闇のうちに秘されてある。またおそらく、不要なものとして排除された生が最終的に向かう場所もこの私的な空間である。アレントによれば私的領域とは、生と死の領域であり、生物学的生命であるゾーエーの棲家であり、神聖な場であり、家族の空間である<sup>89</sup>。ギリシアのオイコスに従って、この領域を虐げられた領域として否定的に位置付けることに対するアレント批判は今日も尚続いている。けれども、今やこの私的領域こそが、政治的空間の前提としてその存在と潜在力を問われているのではなかろうか。アレントの『人間の条件』において語られるゾーエーが、生物学的生命と定義されつつも、他方で世界、不死性および可死性、そして地球と密接な概念であるということ<sup>90</sup>は周知されていない。アガンベンの「剥き出しの生」に相当するものをアレントの文脈の中に敢えて見出すとすれば、「最高善としての生命」より他にない。それは、ゾーエーでもなければビオスでもなく、全体的支配において現れる「イデー」<sup>91</sup>によって無人支配の下に包括されていく生である。これに対して、私的領域における支配形態は権威により人間をそこに存在せしめる。ここに先述した自発性の契機を見出すことは可能である。われわれは、そう簡単に回教徒になることはできないの

である。アガンベンの「剥き出しの生」やホモ・サケルの語りや思考はどこから、どのようにして立ち上がるのか、これがアーレントにより追窮されるであろう。(終)

- 
- (1) Agamben, Giorgio (1995) *Il potere sovrano e la nuda vita*, Torino. 高桑和巳訳 (2003) 『ホモ・サケル——主権力と剥き出しの生』, 以文社。
  - (2) この概念は『暴力批判論』のなかで W・ベンヤミンが語った *Das Bloße Leben* から採られていることは周知されている。
  - (3) アガンベン, G (2001) 『アウシュビッツの残りもの——アルシーヴと証人』, 上村忠男・廣石正和訳, 月曜社。
  - (4) 『性の歴史』第一部「知への意志」においてフーコーが名づけた政治のありよう。
  - (5) バトラー, J (2008) 『国家を歌うのは誰か——グローバル・ステートにおける言語・政治・帰属』, 竹村和子訳, 岩波書店。
  - (6) [高桑 2003 : 解題] 参照。上村の説明は、フーコーが伝統的なものを決して捨棄していないことを示す『知の考古学』が考慮に入れられていないように思われる。
  - (7) この生は、「殺害可能かつ犠牲化不可能な生」と定義されているがこれの詳細な意味に言及するのは別稿に譲る。
  - (8) [高桑 2003 : pp.117f] 参照。
  - (9) 例外化するなわち包括的排除の問題そのものはカール・シュミットらにおいて考察されている。
  - (10) 「剥き出しの生」に対置する概念として叙述されている。
  - (11) [高桑 2003 : p.123] 参照。ローマの創設神話によれば、都市(国家)にとって構成的な行為とは境界を引くことではなく、むしろ境界を否定することである。
  - (12) Villa, Dana.R. (1999) *Politics, Philosophy, Terror*, p.25.
  - (13) Arendt (1951), OT, p.447. 邦訳, p.252.
  - (14) 法的人格を所有するものは刑事制度により処罰ないし保護されるが、そのような制度から除外された者の生への注目が強制収容所の考察により促されている点に留意したい。
  - (15) Ibid., p.452.
  - (16) アーレントは個性や人間本来のアイデンティティを、道徳的人格が三段階にわたり殺害された後で、人間が「生きる屍」になることを阻止すべく残っている唯一のものとしている。
  - (17) Ibid., p.458. 邦訳, p.260.
  - (18) トドロフ, T (1992) 『極限に面して——強制収容所考』, 宇京頼三訳, 法政大学出版局。
  - (19) この根拠としては、アガンベンが『アウシュビッツの残りもの』において収容所の体験の多くをブリモ・レーヴィから引用しているのに対し、アーレントが『全体』において引用しているのがグヴィド・ルーセットであるという点が挙げられる。
  - (20) Ibid., p.438. 邦訳, p.231.
  - (21) Ibid., p.458. 邦訳, p.265.
  - (22) Young-Bruhl, Elisabeth (1982) *Hannah Arendt: For Love of the World*, pp.253. 邦訳, pp.348.
  - (23) Arendt, OT, p.459. 邦訳, p.266. アーレントは不用化をおし進めるものは功利主義的な考え方であるとしている。また、無用化の政治に対して恐怖が何の役割も果たしていないことを問題として指摘している。

- 24) *Hannah Arendt / Karl Jaspers Briefwechsel 1926-1969*, (1985) S.202. 人間を人間として不要にするというのは、人間を手段として利用するのとは違う、その場合は人間の尊厳を侵害するだけでよいとアーレントはこの直後で述べている。
- 25) 先述した上村や他のアガンベン研究者が論じているような、生政治を捉える視点が欠落しているというアーレント批判。
- 26) Arendt, OT, p.445. 邦訳, p.243. ハデスに相当するものは無国籍者や非社会分子、失業者、難民であり、煉獄は無視と乱脈な強制労働が一緒になっているソ連の労働キャンプにあらわれており、地獄を形造っているのは強制収容所であるとアーレントは引用中で述べている。
- 27) [竹村 2008 : p, 26] 参照。
- 28) Arendt, OT, p.438. 邦訳, pp.231f. 自発性というものに、単なる自由のみか、生存というだけの意味での生命が結びついている限り、自発性は完全に排除できるものではないとアーレントは述べている。この自発性とは身振りや眼差し、そして予測不可能性である。
- 29) [竹村 2008 : pp,29f] 参照。
- 30) Arendt,(1972) *Crises of the Republic*, pp.160f. ここでは、収容所や飢餓により人間の脱人間化がもたらされても、それにより人間が動物のようになるというわけではなく、脱人間化が最も明らかになるのは憤りや暴力がきわめて自然的人間の情緒 (emotions) として目に見える形で存在しない場合であると述べられている。この箇所は学生運動についてアーレントが言及している箇所であるが、「自然的人間の情緒」に注目したい。
- 31) [竹村 2008 : pp,74f] 参照。 バトラーはアガンベンが援用するシュミットの主権を権力作用の唯一の見方と考えることは間違っているという。たくさんの権力分析のなかで、私が興味深いのは、主権の典型的場面は追放行為であるとアーレントが語っていることだとバトラーは述べている。
- 32) この著作ではフォーコーのアルシーヴ (archive) すなわちラングとパロールを集めたコルピュスとの間に位置するものが証言という次元の説明に関して引用されている。
- 33) [上村・廣石 2001 : p,222] 参照。
- 34) とはいえ、翻ってみると、剥き出しの生そしてホモ・サケルの圏域それ自体は、暫定的ではあれ区別と境界線これらを根拠としてはじめて成り立つであろう。
- 35) 『人間の条件』の第二章「公的領域と私的領域」参照。
- 36) Arendt(1967)VA, S.17-18.『人間の条件』ドイツ語版で参照。
- 37) Arendt, OT, p.470. 邦訳, p.285.